

櫻部 建著

『俱舍論』佛典講座十八

三友 健 容

アビダルマ佛教教理に興味をもっている者にとって非常に有益な案内書が出版されたことは大変嬉しいことである。これは佛典講座として出版されている一連の講座本の一つである。言うまでもなく、世親 Vasubandhu が著わした『俱舍論』Abhidharmakośabhāṣya は、説一切有部 Sarvāstivādin の教理を

単に整理しただけではなく、經量部 Sautāntika 等の他の部派の考え方を紹介し、ときには問答形式によって説一切有部の教理を批判したものである。この『俱舍論』は有部教学を誤解したものであると、衆賢 Saṃghabhadra によって論駁されたにもかかわらず、佛教教理の基礎学の書として広い地域にわたって伝播し、安慧 Sthiramati、陳那 Dīnaṅga 等の大乘佛教の学者にまで研究されたほど、重要な論書であった。

ことに日本では性相学と称して、唯識学研究とともに長い間佛教学者によって研究・講義されてきた。勿論、これらの研究方法は真諦・玄奘による漢訳と中国人の註釈をもとにしたものであった。

ところが、『俱舍論』の註釈である称友 Yaśomitra の *Sphu-tārtha Abhidharmakośavyākhyā* が発見・刊行されてからは、その研究方法論にもわかに異り、日本のみならずヨーロッパに於ても輝かしい研究成果がぞくぞくと出された。しかし『俱舍論』の梵文原典がないため、この称友の註釈を手がかりにベケット・漢訳から『俱舍論』本文を推定せざるを得ず、長い間、『俱舍論』そのものの梵本はないものかと渴望されていた。幸いにして一九三五年、チベットで Rahula Samkhyāyana が『俱舍論』の梵本を発見し、一九六七年、インドの Prahlād Pradhan によって出版された。これによってアビダルマ研究は一段と盛んになってきたのである。

櫻部建博士はいち早く一九六九年、『俱舍論』梵本の界品・根品を和訳し、その研究成果とともに『俱舍論の研究 界・根品』と題して、労作を出され、また『佛教の思想 2 存在の分析へアビダルマ』という入門書を出版された斯学の第一人者である。しかも今回、『俱舍論』の概説書が、櫻部建博士によって出版されたことは誠に喜びにたえないところである。

さて、本書の構成を紹介すると、『俱舍論』の本頌をもとに、語句の説明とそれら本頌の概説をするという構成になっている。そのため、第八章までで、本頌のない第九章破我品は省略されている。以下、目次にそって内容を紹介していこう。

はしがきに続き、第一編序説 一佛教史上における『俱舍論』の位置として、「アビダルマ」の意味と、いかにしてアビダル

マ論書が成立するに至ったかを述べ、これらのアビダルマ論書の一つである『俱舍論』が、インド・チベット・中国・日本でどのように学ばれてきたかを説明している。

二『俱舍論』の著者・年代・原典および翻訳では、世親に帰せられている多くの著作を五方面に分類し、E. Frauwallnerの二人世親説を紹介し、『俱舍論』の著者は五世紀に在りし、アビダルマ学から出発して瑜伽唯識思想の体系化にまで進んだ傑出した思想家としているが、妥当な見方である。また『俱舍論』の梵文原典の出版と、チベット訳・漢訳・国訳・現代語訳等についてふれている。

三『俱舍論』の内容、組織では、構成を示し、更に各品の梗概を述べている。

四『俱舍論』研究史では、『俱舍論』以後のアビダルマ学について述べ、『俱舍論』梵本発見者であるラーフラによって発見された Abhidhamadīpa や衆賢、称友等のインドの『俱舍論』研究書とチベット訳にのみ現存している註釈書ならびに中国・日本・現代に至るまでの研究史を実に手ぎわよくまとめており、非常に有益である。

第二編本文解説 I 本頌では、『俱舍論』の本頌に従って、まず玄奘訳の白文を出し、次にその読み下しと語句の説明を行い、内容を概説して、界・根・世間・業・随眠・賢聖・智品の解釈を行っている。

II 分別定品第八はそれまでの本頌の解説とは異り、『俱舍論』梵文原典から長行も含めて和訳し、玄奘訳本文と対比し、語句

の説明と内容の概説を行っている。但し第九章破我品は本頌がなく付論的であることから省略されている。

以上が目次にそった本書の内容・構成の紹介である。

今までも『俱舍論』の概説書はいくつかあった。現在比較の入手し易いものには、

斎藤唯信『俱舍宗大意』（明治三十年）

松浦僧梁『俱舍論指針』（明治三十七年）

斎藤唯信『俱舍論講義』（明治三十八年）

村上專精『俱舍論達意』（明治四十年）

梶川乾堂『俱舍論大綱』（明治四十一年）

今岡達音『俱舍宗綱要』（明治四十三年）

高木俊一『俱舍教義』（大正八年）

舟橋水哉『俱舍論講義』（昭和八年）

深浦正文『俱舍学概論』（昭和二十六年）

などがある。

これらの概説書は『俱舍論』の梵本が出版される以前であったこともあって、もっぱら玄奘訳ならびに中国の註釈書による、いわゆる伝統的な俱舍学の説明に終ってしまっていた。

櫻部博士は先に紹介した如く、すでに梵本から界品・根品を訳出しており、この研究成果に立って本頌の読みを訂正しておられる。

いくつかその例をあげると、根品第二偈は旭雅の『冠導俱舍

論』や『国訳一切経』等のように「自境を了する増上は、総じて六根を立つ」と従来読まれてきた。勿論これでも意味の通らぬことはないが、長行では各別の境を了するに勝れているのは五根で、一切の境を了するに勝れているのは意根であって、明らかに分けているし、梵本からも見ても分けて読む方が正しい。本書は従来の読みを訂正し、「自境を了する増上と、総じてとに六根を立つ」としている。また、第八偈の場合などは『冠導俱舍論』は不明であるが、『国訳一切経』は「余処には此れを喜と名く。心の悦ばしからざるを憂と名く。中は捨なり。二の別無し」と読んできた。「二の別無し」では何のことか分らないが、長行では捨根は身・心受の二つに通じ、分別なしとしているのであって、これなどは明らかに誤読である。ところが本書は「余処には此れを喜と名づく。心の不悦を憂と名づく。中は捨なり。二なり。別無し」として、梵本を参照して正確に読んでいる。

また世間品の第九十五偈(玄奘訳)を従来、「相は正しく円明なるにあらず、故に佛と等しきに非ず」と読んで来たが、本書は「相は正・円・明なるに非ず」と訂正している。佛陀の相にはよりよい処に住すること(dhāraṇatara)・より明了なこと(uttapātara)・より円満な心(sampūṇatara)の三が具足していても、転輪王にはこれらがいないことを論じているのである。従来、『国訳一切経』を従来、「墮にして貯ふるに由りて賊起る。防がが為めに雇ふて田を守る」として来たが、梵文では

守田(śetapa)という一語であるから、本書のように「防がが為に守田を雇う」の方が正しい。
このような所はこのほかにもかなりある。また、玄奘訳と梵本では偈にずれが出てくるが、それについても本書は細く指摘している。

以上、本書の要略を述べてきたが、本書が概説書であるという性格上、教理上の問題について、つっこんだ説明のないのは仕方ないことであろう。本来、『俱舍論』全体を長行も含めて説明することになれば、本書の三倍以上の紙数を必要とすることは言うまでもない。ただ、欲をいうならば、『俱舍論』たる所以である世親の教理的立場や、古来名所といわれてきた箇所について、それぞれの該当偈の所で説明してもらえれば、説一切有部との相違や、『俱舍論』の立場も明解になり、更によかったのではないかと考える。

また、これも紙数の制限上止むを得ないことであるが、説明内容が簡略すぎ、初めて『俱舍論』を読むものには、用語の調べにつき当り、かなり困難を感じるのではないかと考えられる。しかしこの点も本書の索引によって用語の説明を一つづつ確認てゆくというもののほかに、著者の一般向けの本である『佛教の思想2 存在の分析へアビダルマ』(角川書店)が『俱舍論』についての興味と理解を増す上でも好書となろう。

ともかくも概説書を書くことは大変難しいことであるが、著者は網の目の如き『俱舍論』の教義を実によくまとめ、

しかも一々の用語を正確に説明している。これも著者の深き見識にして初めて可能なことである。また著者は定品を初めて和訳されておられるが、これらの功績は高く評価されなければならぬ。

本書は『俱舍論』の正しい理解のために益すること大であることを確信し、その業績を讀えたい。

(一九八一年四月 大蔵出版社 B 6 版 三八七頁 索引一二頁 三、〇〇〇円)